



Meijo University



新型コロナ流行下の救急活動に関する調査

—調査結果速報—

畑中 美穂

(名城大学人間学部准教授)

松井 豊

(筑波大学名誉教授)

本研究は消防職員の方との共同研究ですが、所属の公式調査ではないため、**顕名にしていません**

注: 本研究は、2020年度日本心理学会「新型コロナウイルス感染拡大に関連した実践活動及び研究助成」を受けました



救急活動に携わる消防職員の声

- このままでは救急隊を続けたくありません。

これは沢山の救急隊の人達が思っていると思います。

ただでさえ昼夜問わず走り回っているのに更に負担増です。

現場対応をする職員にやる気を起こさせる様な組織の体制を取れるように、社会的に動いていただきたいです。もう本当に辛いです。



研究背景

- 新型コロナウイルス感染拡大 → 救急活動の負担増

- 救急活動に携わる消防職員

:ファースト・レスポnder

医療行為も行うエッセンシャルワーカー

→ 医師・看護師等の医療機関職員と同様の感染リスク

マス・メディア
による報道

社会的注目

国からの
慰労金

- 消防職員の活動は、取り上げられることが少なく、学術的にも研究されていない

研究目的

- 新型コロナウイルスの流行(「新型コロナ禍」)によって生じた救急活動の変化と救急隊員のストレスを検討
- 救急現場が抱える課題を明らかにする

→本速報では、その結果の一部を報告



調査の概要

- 予備調査：救急活動の現状を知る消防職員8名に、面接調査実施
 - 新型コロナ禍の救急活動とそのストレスについて聞き取り
 - 結果をふまえ、本調査の質問項目を作成
- 本調査：機縁法で全国の消防職員に調査協力を呼びかけオンライン調査を実施
 - 回答収集期間：2020年8月5～28日
 - 有効回答者数：2204名
 - 2748名の回答のうち、回答を最後まで完了し、1月以降の救急出場頻度が「月1回以上」の方を分析対象に。



調査の概要

- 予備調査: 救急活動の現状を知る消防職員8名に、

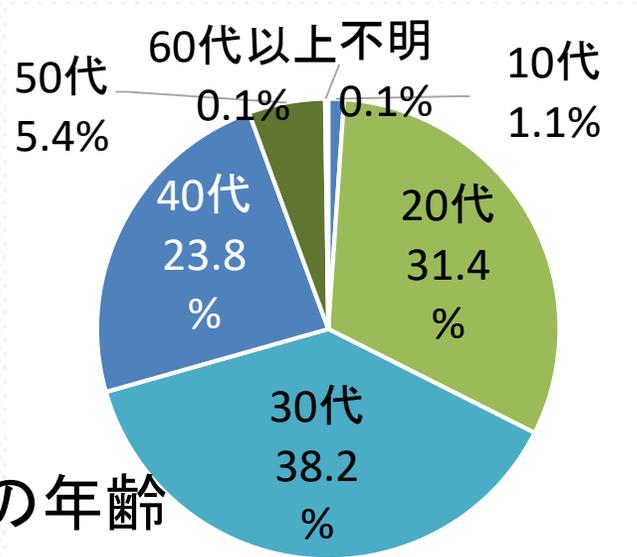
研究者の知己のネットワークにより、消防機関の協力も得て、対象者の条件に該当する全国の消防職員に調査参加を依頼

活動とそのストレスについて聞き取り
の質問項目を作成

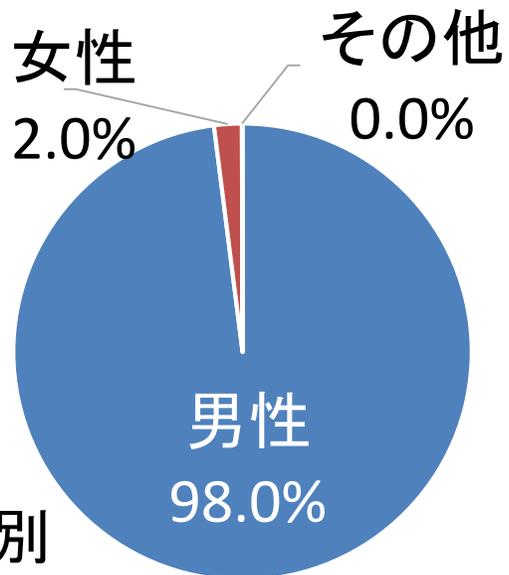
- 本調査: 機縁法で全国の消防職員に調査協力を呼びかけオンライン調査を実施
 - 回答収集期間: 2020年8月5～28日
 - 有効回答者数: 2204名
 - 2748名の回答のうち、回答を最後まで完了し、1月以降の救急出場頻度が「月1回以上」の方を分析対象に。



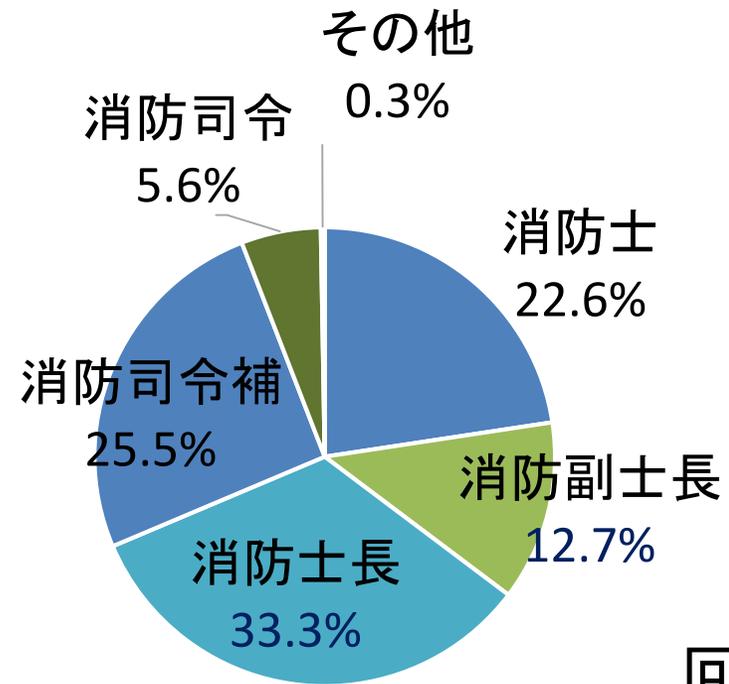
有効回答者の属性



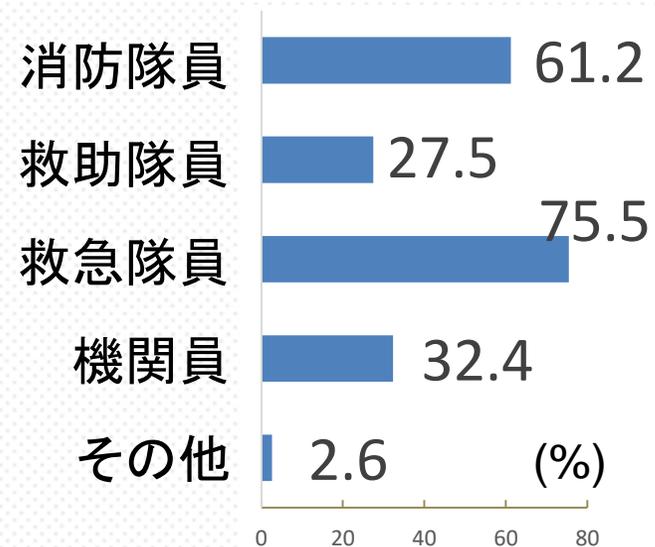
回答者の年齢



回答者の性別

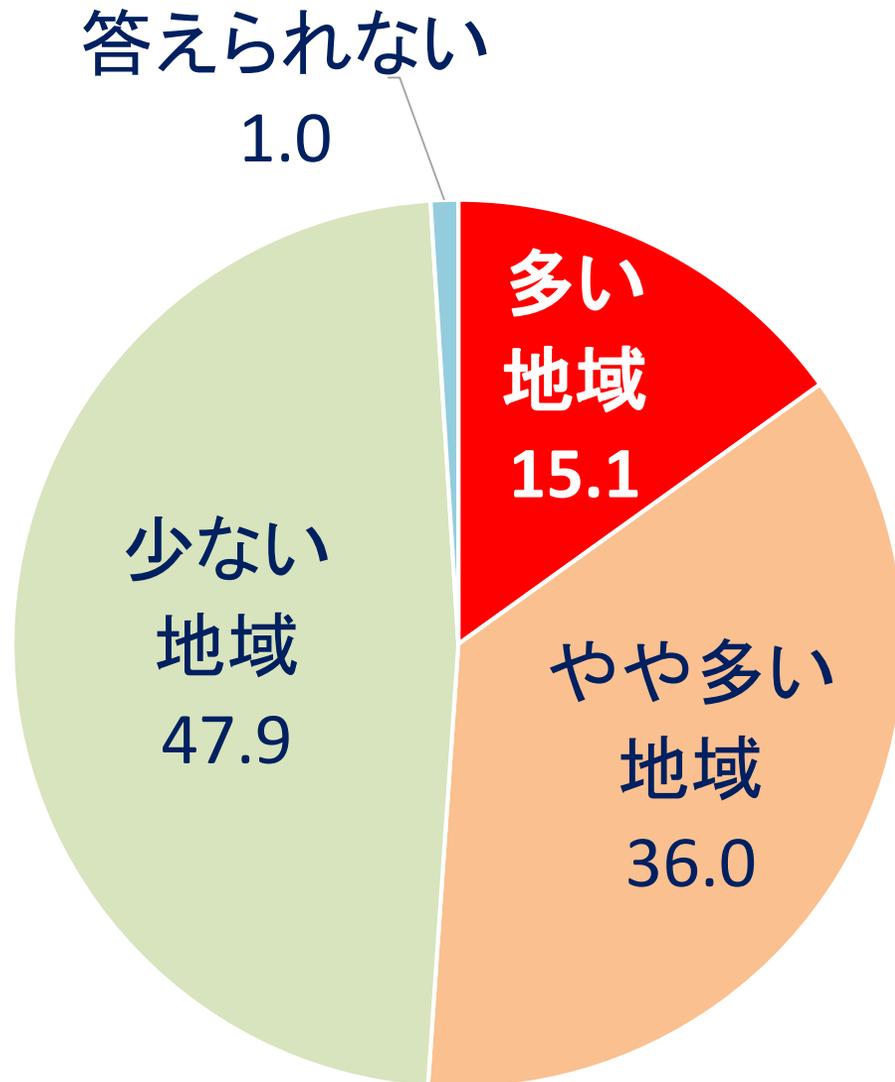


回答者の階級



回答者の職務
(多重回答)

有効回答者の属性〈感染者数別にみた所属本部の地域〉



「感染者数別地域」として
後の分析に使用

7月31日付けNHK集計の都道府県別累積感染者数

- ◆ 2000人以上：
「多い地域(東京都・大阪府・神奈川県・埼玉県)」
- ◆ 800人以上：
「やや多い地域(福岡県・愛知県・千葉県・北海道・兵庫県・京都府)」
- ◆ 799人以下：
「少ない地域(上記以外)」



結果 —活動中の体験—

4. ゴーグルやフェイスシールドが曇るなど、感染防護装備のために、活動がしにくかった

13. 傷病者に発熱があるだけで、感染リスクや新型コロナ対応の消毒などを考えなくてはならなかった

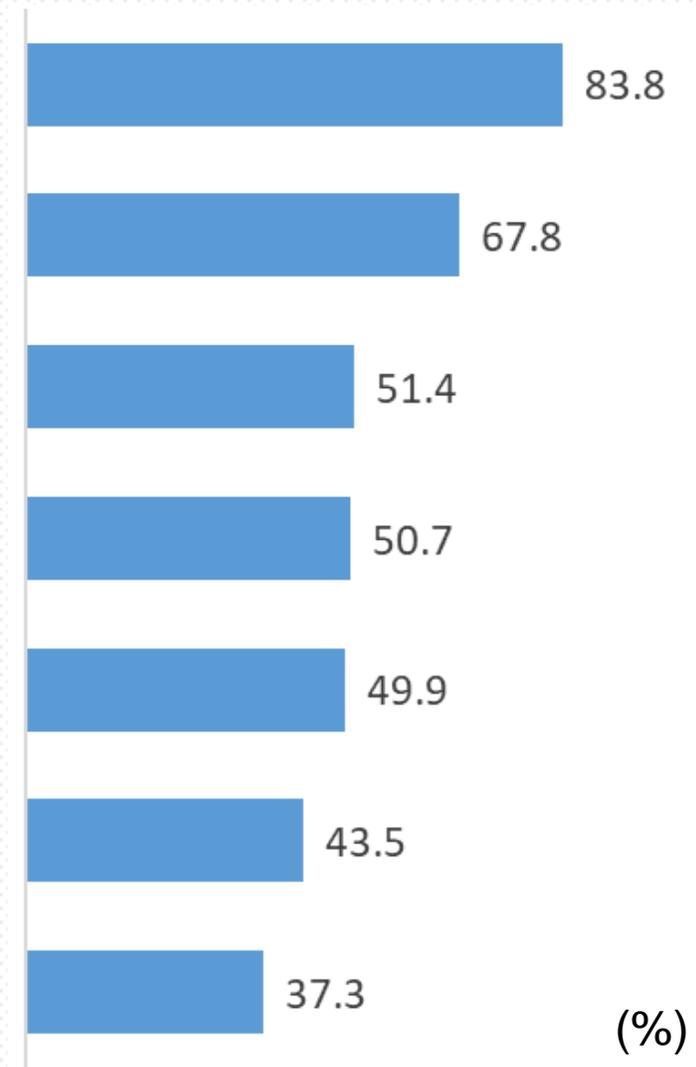
12. 感染を判断する基準から外れている傷病者でも、感染しているのではないかと思った

16. 帰署後の車両、資器材及び身体の消毒や洗浄に時間を要し、次の出動に支障が出た、または(支障が)出る恐れがあった

6. 感染防護衣での活動は暑くて、体調管理が難しかった

14. すべての事案に対して、新型コロナ対策をとって出動しなければならなかった

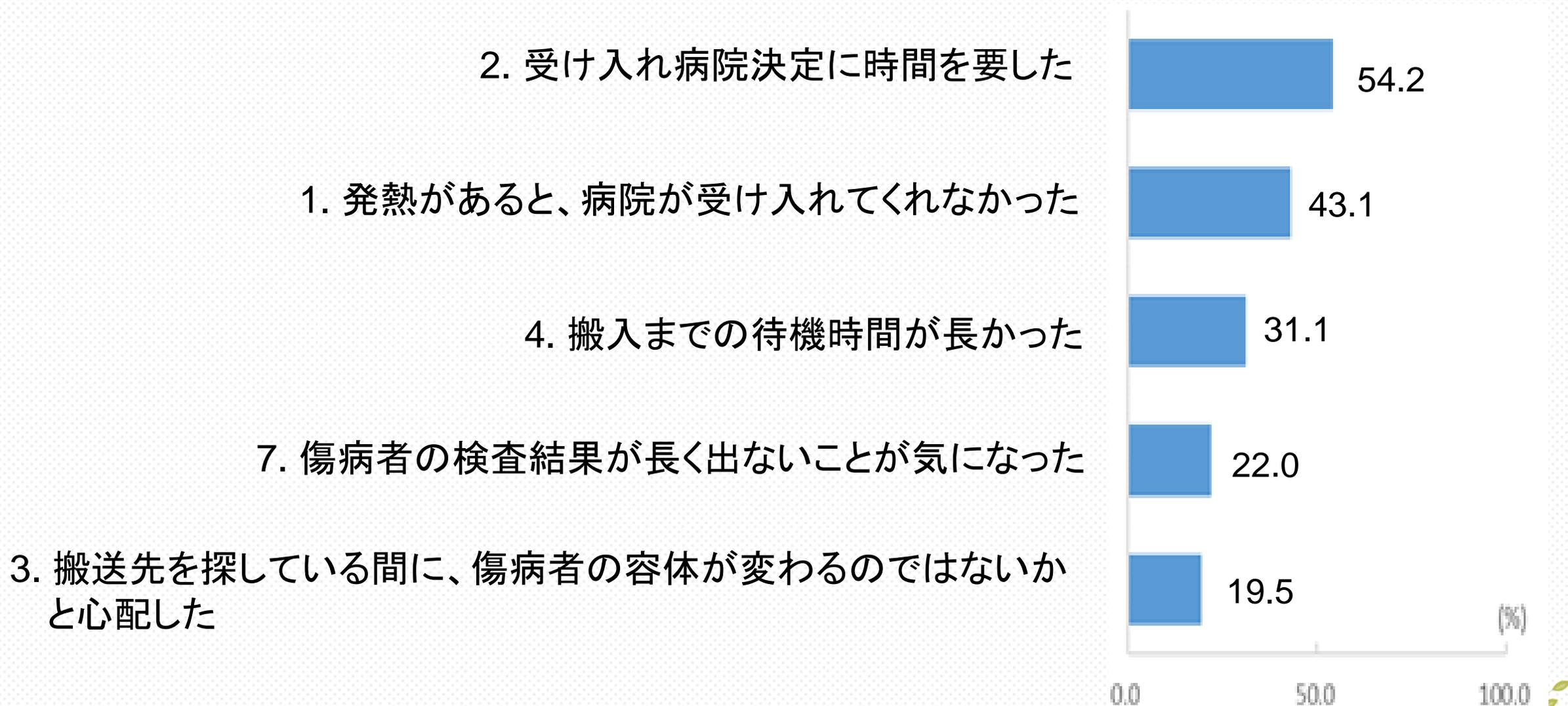
10. 感染防護の装備のために、活動開始が遅れた



(%)



結果 —病院選定时、搬送先での体験—



結果 —救急活動後の体験—

4. 感染防護資器材(マスク、ゴーグル、感染防護衣など)の追加納品が難しいことから、それらの在庫状況に不安を感じた

5. 自宅待機になったら、周囲に迷惑がかかると思った

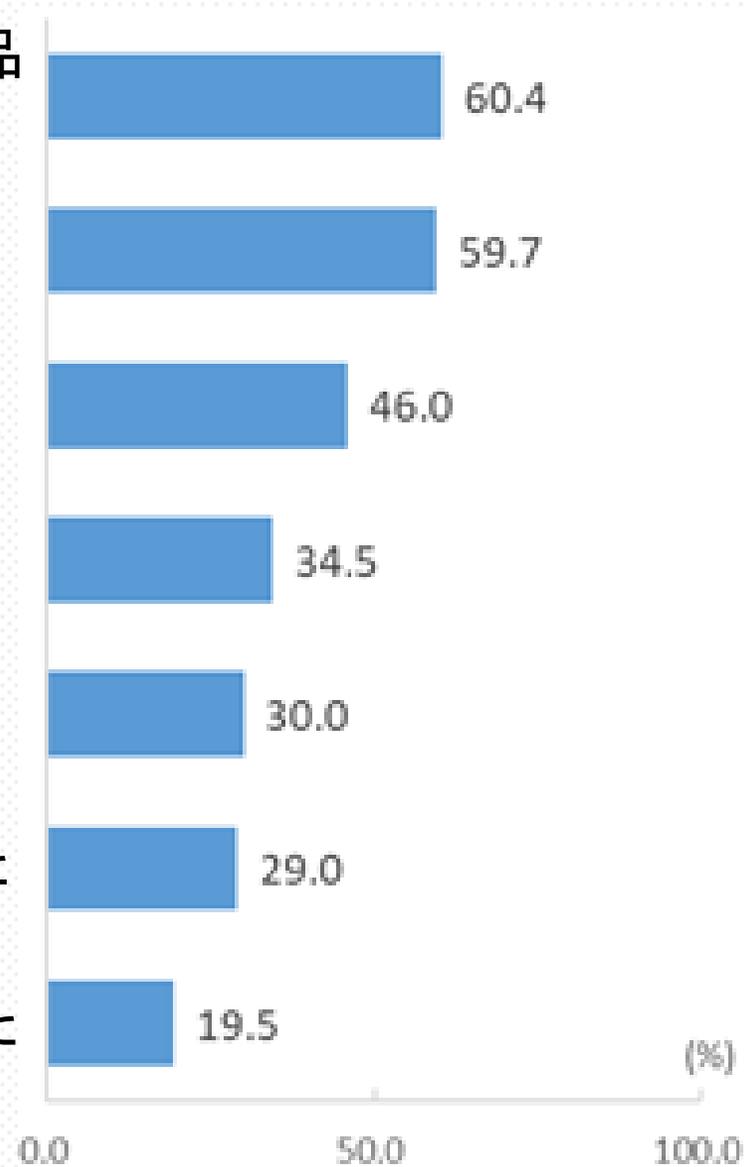
1. 活動した隊員が不安を感じた

8. 自宅待機になると、職場でイヤな噂が流れそうだと思った

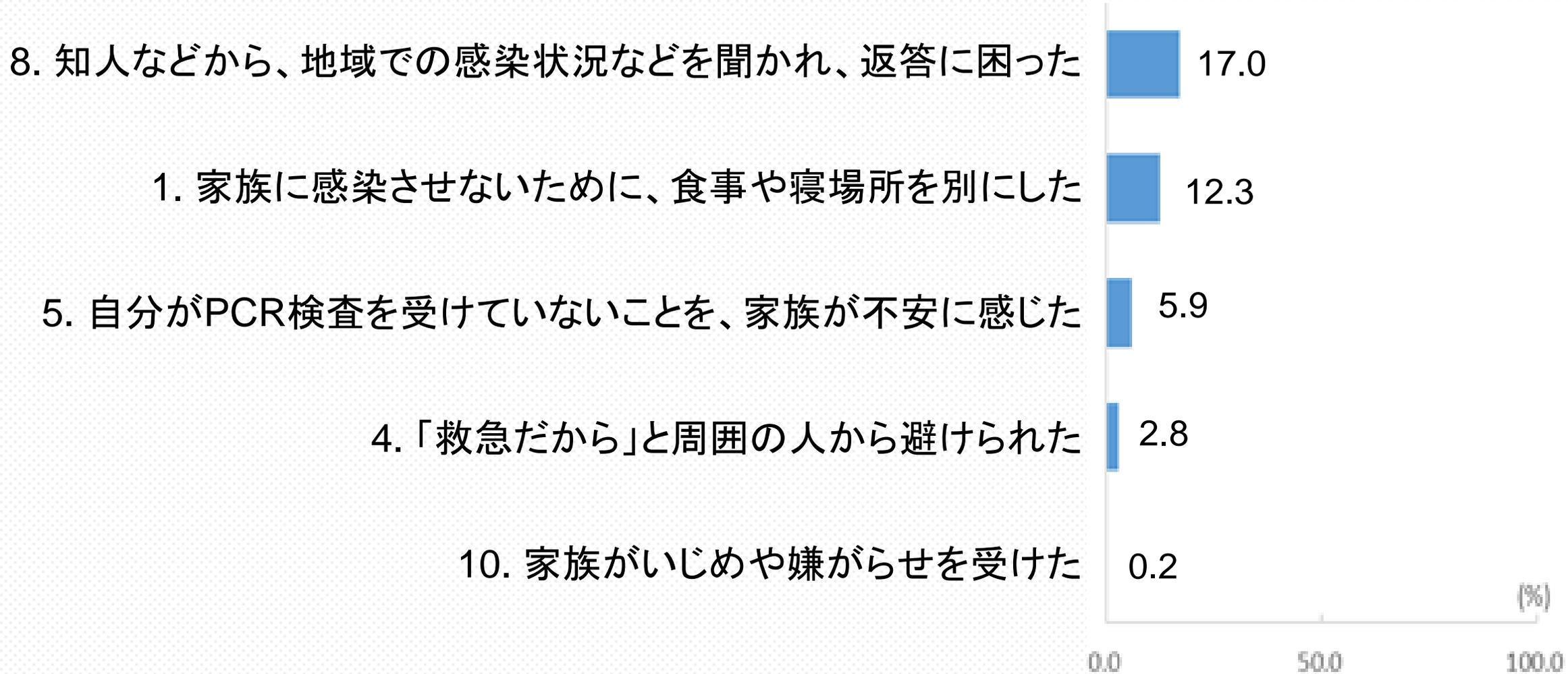
6. 自宅待機になると、職場で犯罪者扱いをされてしまうのではないかと思った

10. 新型コロナの対応でシフトや活動内容が変わった

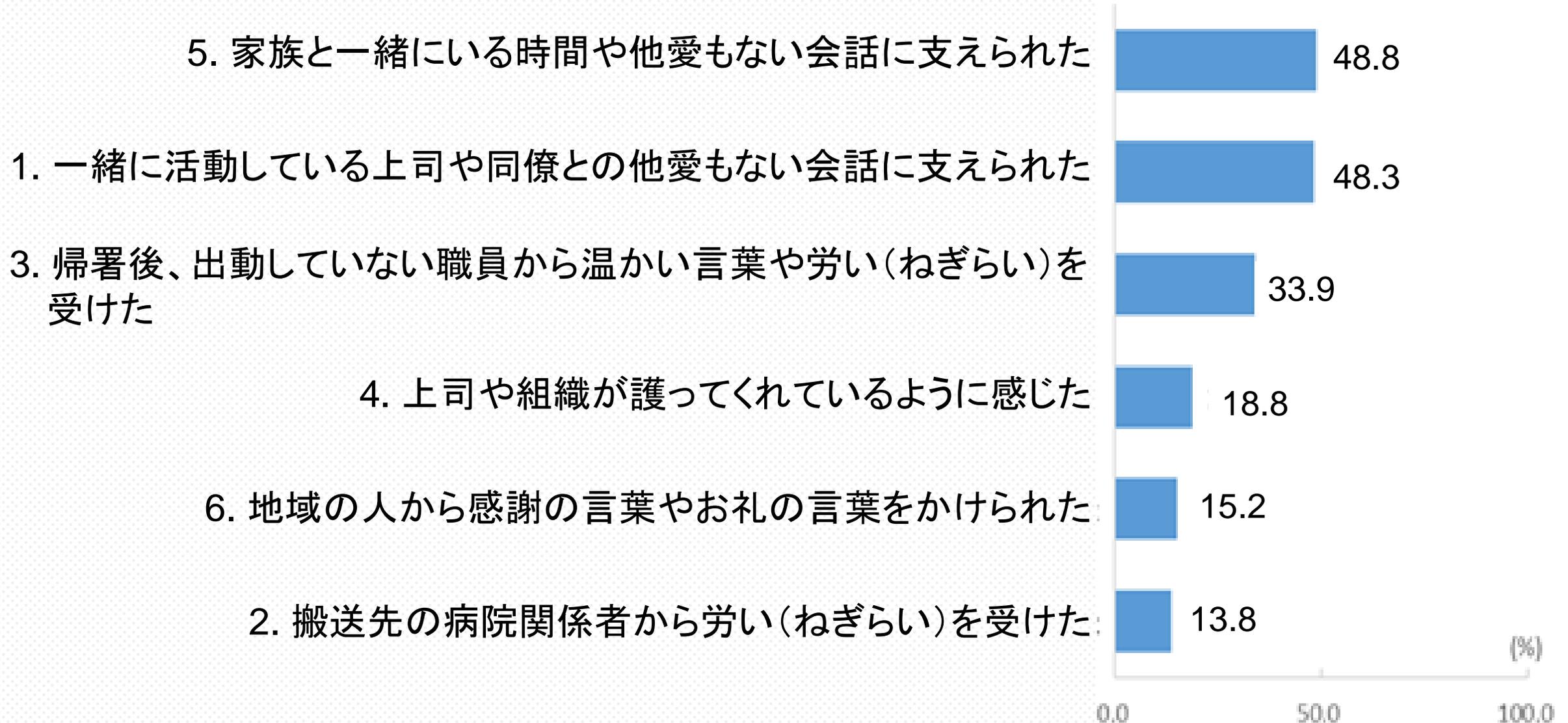
2. 感染防護衣などを何度も洗って使用した



結果 —家庭や日常生活での体験—



結果 —心の支えとなった体験—

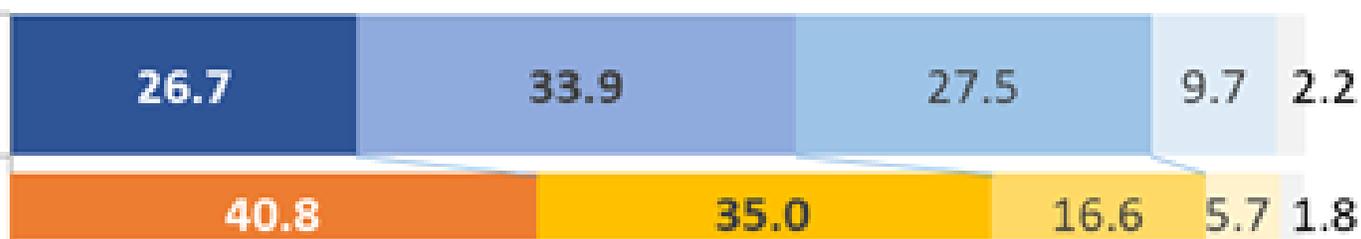


結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —

■ 強く感じた ■ 感じた ■ 少し感じた
 ■ あまり感じなかった ■ 全く感じなかった

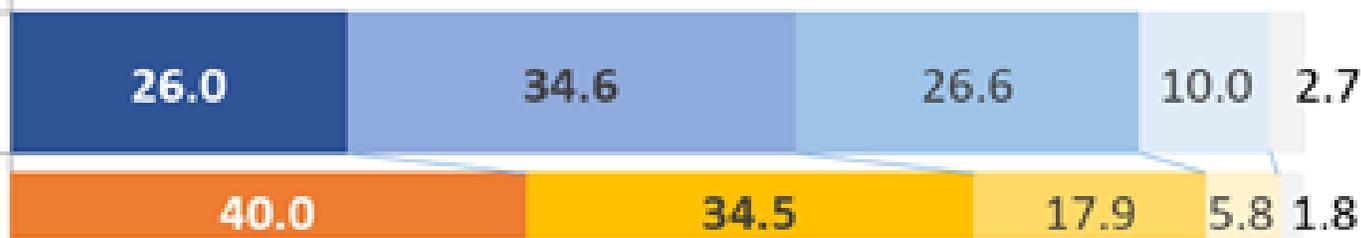
3a. **自分**が新型コロナに感染する
 かもしれないという不安

〈感染が多い地域〉 n=331



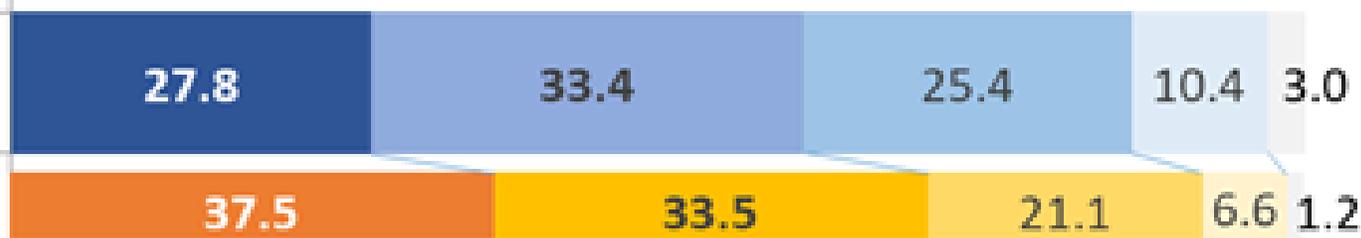
3b. **隊員**を感染させるのではないかと
 という不安や申し訳なさ

〈感染が多い地域〉 n=330



5b. 帰署したときに、**他の職員**を感染
 させないかという不安

〈感染が多い地域〉 n=331

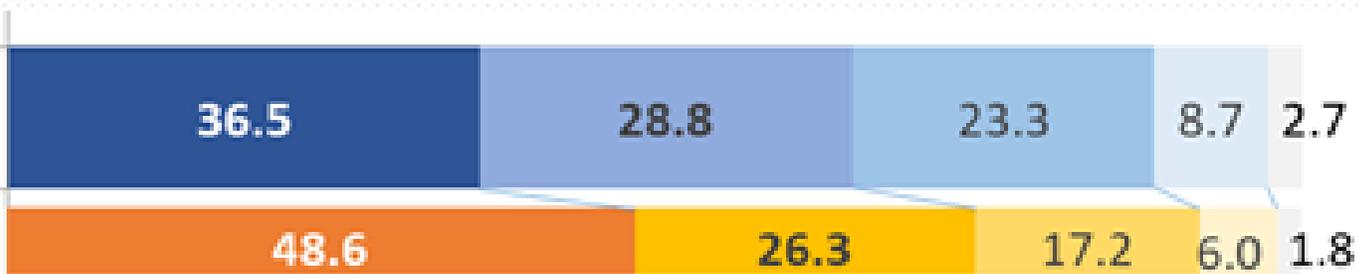


結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —



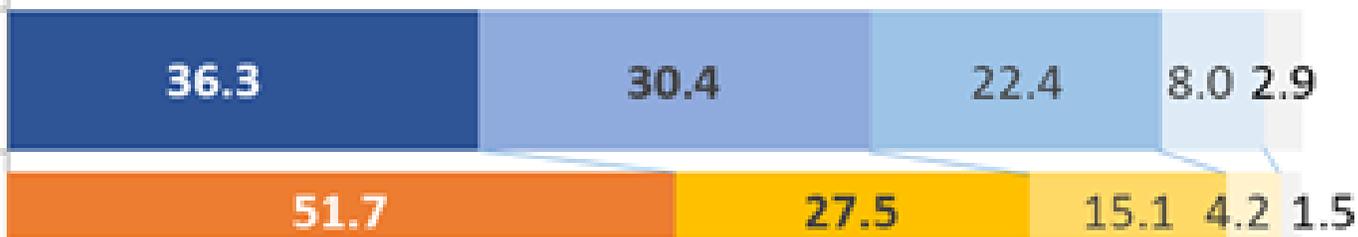
7a. 自分を介して、**家族**を感染させる
のではないかと不安

〈感染が多い地域〉 n=331



5a. **隊員の家族**を感染させるのではないかと不安

〈感染が多い地域〉 n=331

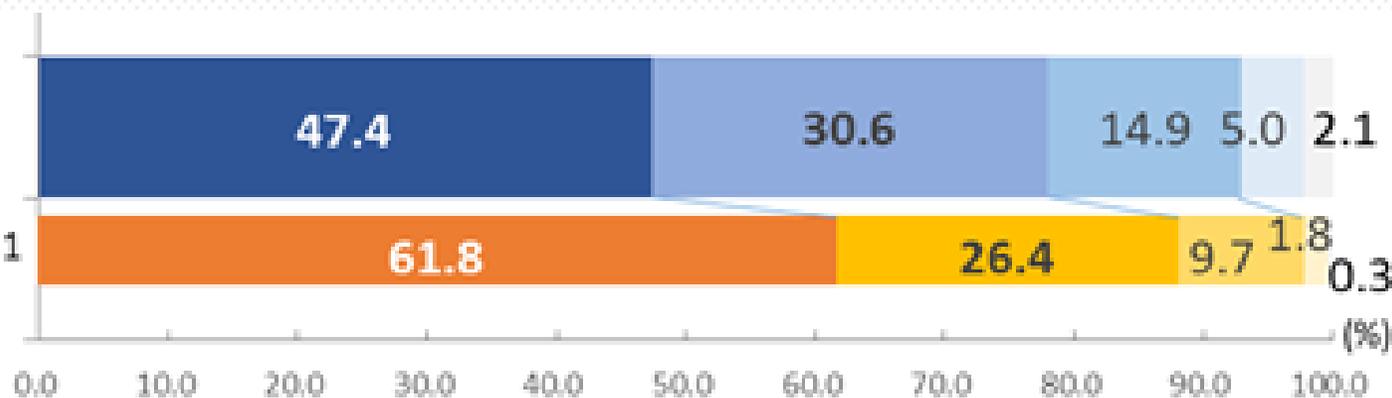


結果 — 救急活動に関わる不安やストレス —



3d. 感染防護衣での活動が、暑さや動きにくさで、つらかった

〈感染が多い地域〉 n=331



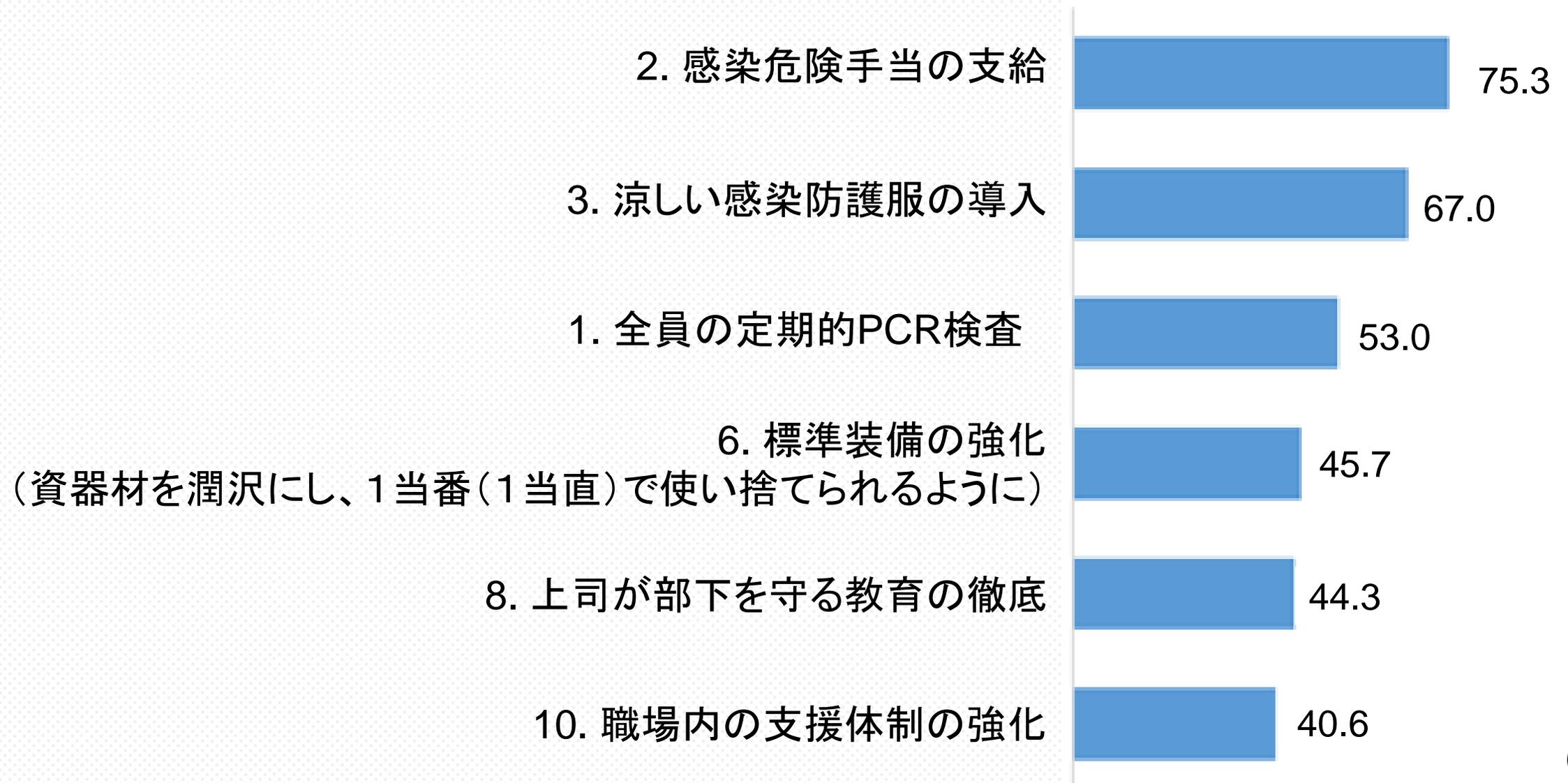
結果 —救急活動に携わる消防職員の声—

〈コロナ禍における救急活動の負担〉

- このままでは救急隊を続けたくありません。これは沢山の救急隊の人達が思っていると思います。ただでさえ昼夜問わず走り回っているのに更に負担増です。現場対応をする職員にやる気を起こさせる様な組織の体制を取れるように、社会的に動いていただきたいです。もう本当に辛いです。
- 資機材も足りない。人員も足りない。消毒時に出勤不能になってもそれを充足するだけの車両もない。手当もない。自宅待機になった際の宿舎のような場所の準備もない。この状況が長期間続くのであれば、救急を下りたい人が出ても仕方ない。むしろ下りたい人が出てきている。



結果 —必要な対策—



(%)



提言

- ① 感染防護資器材の充実・改良
- ② 感染危険手当の検討 ～国だけでなく自治体も～
- ③ PCR検査を受けやすく
- ④ 組織が護ってくれているという実感が持てる職場作り
- ⑤ 一般の方も消防職員の救急活動に理解を



調査実施にあたり、多くの消防関係の方々に
ご協力をいただきました。記して謝意を表します。

